全通研青森支部と共に40年！ パワフルあさちゃん

千葉 あさ
青森市

去る12月３日、予定されていた2022（令和４）年度第５回全通研青森支部（以下「青通研」）運営委員会は、１日の晩からの積雪が40cmに達したことと、新型コロナウイルス感染症の状況も考慮して、急遽オンラインを併用した開催となった。会場に参加できたのは、青通研・千葉あさ会長と事務局次長の戸嶋哲子さんの２名のみであったが、青森県聴覚障害者情報センターの皆さんの協力もあり、検討案件がびっしりあったが運営委員会はスムーズに進行した。その前日、今年40周年を迎えた青通研の立ち上げ時に奮闘した、発起人６名のうち現在も活動している３名が顔をそろえた。あささんは、研究誌第159号の「手話通訳者に聞く⑧自治体正職員の手話通訳者の働き方」にも登場している。あささんの仕事については同記事に詳しく記載されているので、ここでは主に40年にわたり青通研をけん引してきた“三羽烏”の皆さんに、青通研のこれまでの活動と、これからの目標などについて聞いた。　※グラビアページでは、写真撮影の瞬間だけマスクを外していただきました。

▶写真　青森県聴覚障害者情報センターのベランダにて。
写真中　千葉あささん（青通研会長、手話通訳士、介護支援専門員）
青通研の設立発起人の一人として尽力、40年間にわたりリーダーシップを発揮してきた。青通研の生き字引として、幅広い運動・活動に邁進している。

写真左　三浦敦子さん（手話通訳者）
高校１年の時、全国で初の「手話研究会」を発足させ、３年の時に２年の小山内さん、１年の千葉さんらと共に活動。以後研究会の卒業生が青通研に入会するなど、青森県で手話通訳活動を志す人たちへ道筋を拓いた。

写真右　小山内敬子さん（手話通訳士、青森県聴覚障害者情報センター職員）
ろうあ協会会員が家賃を出し合って借りたアパートが集会場だった40年前から、青通研の成長と共に歩む。勤務先の情報センターでは手話通訳者などの派遣のコーディネート業務などを担当。

▶写真❶
ベランダから雪の八甲田山を望む。

ろうあの人から学べ！見よう見真似で覚えた手話

あささんが手話を学ぶきっかけは、高校の時、２年先輩の三浦敦子さんの誘いだった。高校の向かいにあった聾学校の生徒との交流がきっかけで手話に目覚めた三浦さんは、「手話研究会」を作り、70人の生徒を集めた。あささんは、「２年先輩の三浦さんに誘われ、私も聾学校の生徒たちと話ができたらと思い、即答でした」。しかし、当時は手話が禁止された口話教育の時代で、聾学校の廊下には「手話禁止」の貼り紙があり、ろうあ者に対する差別もあったという。やがて青森県では、ろうあ協会が主導する形で手話通訳を志す仲間との連携による活動が始まった。手話を学ぶといっても、教材があるわけではなく、ろうあ者の手話を見よう見真似で必死に覚えたとあささんは振り返る。

▶写真❶❷
2022（令和4）年度第５回青通研運営委員会。今回はオンラインと併用での開催となった。各地域班の運営委員から活動報告があり、検討事項は多かったものの会議はスムーズに進行した。

▶写真❸
40年前の青通研設立時を振り返る3人。
三浦「ろうあ協会会員が集会所がほしくて250円出し合ってアパートを借り、毎晩のように集まり話した」
小山内「ろうあ者や手話に対する差別も当時は根強かった。中には手話を見ると“ろうがうつる”などと酷いことをいう人もいた」
千葉「集会や会議の後は必ずろうあ者と一緒に喫茶店に行って、続きを話し合ったよね。みんな熱心だった」

▶写真❹
青森県聴覚障害者情報センター（外観）。聴覚障害者の自立と社会参加の促進を図るため、字幕・手話入りビデオの製作・貸出、手話通訳者・要約筆記者養成などを行い、聴覚障害者への情報提供の中心となっている。

全員が賛成ではなかった「青通研」の発足

1974（昭和49）年６月に青森市で「第23回全国ろうあ者大会」と同時に「第７回手話通訳者会議」が開催され、全国から287人を超える手話通訳活動者が集まり、この時、全国手話通訳問題研究会（以下「全通研」）が発足した。これを機にテレビに手話通訳が付き、設置手話通訳者の雇用が始まるなど、さまざまな効果をもたらした。しかし、手話通訳者は手話サークルから誕生していた時代で、新たな別組織の発足や目指す手話の方向性の違いに対し否定的な人たちもいて、全通研の理念に理解を得るのに８年という長い歳月を要した。あささんは、今日まで続けてこられたのはろうあ協会や青通研の仲間の支えと、正職員として市役所に所属できたことが大きいという。全国には不安定な非正規で頑張っている手話通訳者が数多くいる。手話通訳者が収入面でも一本立ちできるようにするのが急務だと語る。三浦さんも、これからの課題として手話通訳者の身分保障への取り組みを強化すべきと指摘した。

▶写真❺
青森県聴覚障害者情報センターの皆さん。アパートの1室から始まった、ろうあ協会と手話サークル、青通研の念願の活動拠点が2000（平成12）年、ついに実現。情報センターでは、手話通訳者などの養成、設置、派遣、指導者育成などの広範な事業を実施。千葉さんは、手話通訳指導者としても活躍している。入口にはろうあ協会が中心となって運動してきた証の会館設置当時の「社団法人青森県ろうあ協会」の看板がある。

手話を取ったら何が残るの？ 一番の理解者はご主人

青通研とともに40年余り走り続けてきたあささん。20歳で結婚し、３人の子どもと10人の孫に恵まれた。手話通訳の技術向上と手話の普及にいつも全力投球を続けてきたが、たまたま弱気になったときに「辞めようかな」というと、「あなたから手話を取ったら何が残るの?」とご主人がほほ笑んだという。あささんの一番の理解者なのだろう。リラックスしたい時は、息子さんのお嫁さんのご両親が経営するレストラン「K-YOSHIDA」に夫婦で出かけ、ゆったりと過ごすという。手話通訳者として青森市に採用された当時は、20歳前。窓口に訪れた年配のろうあ者に「あなたの手話は分からない、通じない」と言われ、トイレに駆け込み泣いたこともあるという。青通研会長として多忙な日々だが、将来はろうあ者のための高齢者施設で、ろうあ者や手話に関わる仲間と一緒に暮らすのが夢だという。

写真／文　佐藤 篤

▶写真❶ くつろぐ千葉あささんと夫の千葉洋一さん。
▶写真❷ 青森市浜館にあるフレンチレストラン「K-YOSHIDA」。
▶写真❸ 「K-YOSHIDA」のオーナーシェフ吉田さんご夫妻と。
▶写真❹ 工夫を凝らしたシェフ自慢の料理。